

Reprint of “*Remembrances of life in Taiwan*” by Atsushi Shidama

Tomoko TAKASHIMA (University of Tokyo)

【Keywords】 Amami, Taiwan, repatriate, modern history

“*Remembrances of life in Taiwan*” is a memoir left by Atsushi Shidama, who was born in Sumiyo on Amami Oshima. Shidama (1907-1956) moved to Osaka in order to attend an English language school. Subsequently, he became a police officer in Taiwan under Japanese rule. In the early 1930s, Shidama worked in an area where there was a detention camp for indigenous people involved in the Wushe incident. A part of Shidama's diary is included in “*Modern History Materials 22 Taiwan*” (Misuzu Shobo, 1971) for a record of the second Wushe incident.

Shidama's daughter Atsumi has had kept of “*Remembrances of life in Taiwan*” about for sixty years. Shidama started writing this memoir, divided into eleven chapters, toward the end of his time in Taiwan. It comprises reminiscences and various literary items, yet Chapter 11 has a different character. It covers the period from 6 December 1945 to 2 October 1946. The content can be divided into a) a record of the 49 days he spent waiting to be repatriated from Taiwan to Japan and b) a record of the 15 days he waited for repatriation to Amami Oshima from Kagoshima City.

辛い思いもかずくあれど

からりと晴れた日本晴

三、浜で送らうよ南の方を

テープ引かねど血潮は通ふ

緑綾なす城山よりは

ジツと見送る西郷さん

四、一夜あくれば緑の島よ

泣いてくれるな浜辺の千鳥

蘇鉄花咲くいとしの故郷に

抱いて迎へる親が居る

五、さらば鹿児島よ又来るまでは

港鹿児島グレンの響

海の彼方に連なる島と

熱い情は変りやせぬ

は大島人の感激禁じ得ざるものである。

本研究はJSPS 科研費 15K16821 の助成による。

てをる 六千余の市内居住の皆さんから四十二名の委員を出して貰つてをるが口角泡を飛ばしてやつてをるわけだ

(司法省の谷口事務官 佐藤元台銀(□□新報) 有田 ケイ両委員中央へ)

マ司令部は事情は分つた。チ係官署へはからつてやるといひ厚生省では増船しようといふことも言つた。

更に県から社会課長と業務部長が上京したが此時はマ司令部は漫然とは増船はせぬ 十月一日は零時を期して調査報告せよといふことだつた。食つて行けないやうな人々には一時援護救済の方法を取ることにする。

河内署長挨拶要旨(大和浜出身)

敗戦の苦労は大島と沖繩人が皆背負うた。送還については公職の立場からお願いしてをるが日本の行政が権が及ばない。

市在住の皆のため本田課長に感謝しそれで私は何処でも引張られて行く。一人の不平不満者もなく送出は出来ぬ。

郡民一同市当局の恩を忘れてはいけない 市の計画により円滑に帰つて貰ひたい 我々の出来ることなら公私とも遠慮なく言ふてきて貰ひたい。

木脇代表謝辞

当局の御心苦はよく存じてをります 市当局並に警察当局に感謝を申上る。

帰還完了迄は幾多の多難な事情がある。いろ／＼不遜な言動者もあることはご精察を願います。一万余名の者の早々帰還のご配慮を乞ふ。(次は皆に向つて) 指を喰へて時を待つゝ帰りたい切なさはみな同じ。繰返へされる種々な事件に傷心す。止むに止まれぬ生活上

の苦しさにはあるが自重せよ。不心得者が中にある。

皆がどんな顔して見えるか：

自分自身家族を如何にして生かしてゆくかを思つてをる。

勝ち抜いて下さい 委員は寝てはゐない 情報のたびに当局に連絡してをる 委員も議長の心情に協助す

開演

一、鹿兒島夜曲 松山外 一、娘浪曲師 営繕課宮原 一、愛染草紙 農産課石井 一、張切ボーイズ劇 迫外四名 縁は異なるもの味なもの 一、伊那の勘太郎 住宅西元君 一、湖畔の乙女 会計課□浦 一、深川 庶務松山君 一、あの花この花 水道課福山 一、漫談 商工課 藤井 一、泰の娘 有村先生 一、独唱 西元君 一、チンダ節 松山外 一、野崎小唄 農産課石井 一、大利根しぐれ 秘書課津山 一、誰か故郷を思わざる 酒匂 一、瞼の母 劇ボーイズ連中「子を持つ親はそんな邪険なものぢやないわよ」(迫さんとかの真にせまつた名公日 皆を泣かしむ) 一、支那の夜中原 一、娘心上州路 宮原 一、初出の姿 有村 一、花見おどり 西元外 等々あり 且又、

送る歌

一、さらば鹿兒島よ又来る迄は

しばし別れを心に秘めて

遠く南に旅立つ者も

同じ希望の火と燃える

二、夢に忘れぬ懐かし故郷に

明日は船出よ心は踊る

くれる一方だ。時々警察の眼が光るけれども何等のこたへも見せない。大事に草木生ゆるが如く大衆のあるところ市場は繁盛す。恐らく日本が立派に立り直るまでは続くであらう。或る人が言つた「闇市の根強さは窮屈な粹に対する無言の抗議なんだ」と。

八月五日

余は頭の中では此の頃の思想傾向など分かつたつもりであるが具体的な問題にぶつかると習慣の力といふのは恐ろしいものでやつぱり封建的な考へをしたりそれを言行に現はしたりする。

世の変転とはいへ過去のすべてを捨つべきではないと思ふが故である。一巡査長でしかなかった余ではあるが台湾省民から神様とまでいわれてなつかしまれ、終戦後迫害を受けた者の往々あつた中でも大手を振つて歩けたし引揚げの日など公職者も自由業者も駅迄送つてきて泣いて別れてくれたことを思へばもう一生埋木となつたところで悔やむところはない。

社会教化委員や方面委員や婦人会の顧問などを囑託されてゐたとはいへ別段彼等のため働きがあつたわけでもないが「心の貴族」を信条とする余の姿が知らず／＼婦女子達にまでも沁み込んでゐたであらうと思ふ。

八月十五日

我等待望乃大島への船がいよ／＼今日から許されて出ることになつた。先般第一回乗船の通知を受けた者ばかりでなく皆の顔がいくらか晴れやかになつてをる。たゞうちようてんになりきれないのは自身の順番が分らないためである。

慶長より明治初期にかけての二百六十年間島津藩代官政治に禍され奴隷生活を続けてきた、め現今に於ても鹿児島人は島民を蔑視しをるが余に対される徳光国民学校の山ノ川勝己先生は神の化身か肉親といえでもかうまでやつてもらへるかと思う程面倒を見て下さる実にオアシスだ。

先生も二林で正と共に勤務してをられた引揚者なのであるが明朗闊達とはこの人のために出来た言葉だと思はれるほどだ。余がこちらにをるかぎり世話をつゞけられる御意思を推するとき有難さ筆舌の尽くすところを知らず

十月二日

其の日／＼の生活に悩まされてペンを持たなくなつてから既に一月半になるが今日は鹿児島市の援護課から我に帰還者慰安のための会合を大正会館において催して下さつたから書いておく。

会次第

一、一同敬礼 二、開会の辞 三、市長挨拶 四、帰還手続について 五、警察署長挨拶 六、機関車大乗謝辞 七、開演 八、閉会之辞

勝目市長挨拶要旨

思ふやうにならぬ、これからはよくなるからしばらく辛抱して貰ひたい。お互い同県人としての交際を願ふ。

本田援護課長挨拶要旨

自分が警察部勤務中大島へ出張して古仁屋に滞在中アメーバに罹り郷里へ帰れたかつた時の心を思ひ起せば皆さんがどんなにか望郷の念にかられてをられるかはよく分かる。ほんとに心で泣いて断はつ

公文

米国海軍少将ジョン・デイル・ブライス

南西諸島軍政副長 米国海兵大佐シアーム・レ

一九四六、一、一三、 みやこ新報による

1、二月十一日以後 郡内通貨持出禁止

2、マツクアサ司令部では十二月三十日の指令で今回の総選挙は北緯三十度の鹿児島県大島郡の小さな島などに限定することを指令して来たので奄美大島沖縄地区は今度の選挙には除外されることになった。

これが現在の我が郷里の姿である。何日になれば帰還が許されるだらうか。思へば寂寥ヒシとせまる。

七月二十日

此の頃美坊が食生活の不足で痩せてゐるながら不思議にも闇市場へ出かけて親の手伝いをやる。郷里に帰りつくまでは学校へも行けないことを思ふと戦争の責任は奄美人と琉球人とでのみ負ふてをるやうなひがみさへ起る。

一つ積んでは父の為、二つ積んでは母の為と御詠歌が思はず口に出てくる。あの賽の河原とは小供の地獄で多くの子供が石の塔を積み重ねると火焰を吹き出し子供も共に燃えて白骨となる。その時地藏菩薩が出現して錫杖でかき集めて経文を唱へると子供たちはもとの形に変わるとか子供は母の胎内にな永くゐて母を苦しめてゐながら恩に報ひずして世を去るからその罰であると言はれてをる。

さしあたり美坊が今のやうな生活が続くとして栄養失調などで斃れ

でもするとしたら極楽浄土へ行くだらうなんてほんとに度はずれたことまで考へる。しかしまた静かに眼をつむつてつらく観ずると決して世を呪つてはならないと思ふ。そもく大東亜戦争は帝国の自存と東亜の安定を御祈念遊ばされての御開戦であつた。然るに陛下の大御心である信義を竭さずして武力にも道義にも破れた。何故か。文武完了の独善を制し得る政治家がゐなかつたからである。

陛下は八月十四日最後の御前会議で「朕は世界の大局とわが国の情勢を慎重に考慮した結果 上は皇祝皇宗下は一般臣民に対し忍び難きを忍んで予ての方針通りポツダム宣言受諾に進みたいと思ふたとへ朕の一身は如何にあらうとも、これ以上国民が戦火に斃れるのを見るには忍びない。この際朕のしてよいことがあれば何でもしよう」とのたまはせられ御涙は尊顔を伝はつたこの余りなる御聖慮ぶ参列の諸官は御前にひれ伏して皆声を挙げて泣いたと聞いてをる。

戦ひの目的が単に勝利を得ると言ふことでなく平和幸福の世界を建設するのが目的ある以上 勝つたからいいとか敗れたから悪いとか言へないと思ふ。それでこれからは平和な世界をつくるやうにつとめて生きてゆかねばならない。

八月一日

今日も闇、明日も闇、明後日も闇。闇を書くことが敗戦日記の真の姿といふものかも知れない。個人の闇は昨日や一昨日でもうたくさんだ。一つ今日は闇市場を現代人話題の筆頭として書かう 一体どこから仕入れてくるのかよくもあれだけ品物を集めたものだ。

統制と配給で物の世界を忘れてゐた大衆が金さへ出せば何でも買へるのにチャームされるのは当たり前だ。だから闇市だけは細る人民をよそにふ

「吾十有五而志乎学、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲不踰矩」と言つてをる。

人は時の流れにはやつぱりどんなにしても勝てぬものらしい！

七月三日

此の頃の闇は理屈や説明を超越してほんとうに生きんがための絶対的手段である。余も買出し部隊の一員でまあいくらかの闇をやつてをるわけだ。そうしなければ親子三人みすく餓死するからだ。武士は食はねど高楊枝ではをられない、やつぱり腹が減つたら戦は出来ぬのだ。終日田舎を歩き廻はつてやうく九拝十拝否百拝してやうやく求めてきた僅か一貫か二貫の甘藷を少しは自家用にして一部は燃して美坊が売りにゆく。あ、くこんな姿になるなんて敗戦国民のみじめさを泣かずにはをられない。

七月五日

昭和二〇、二一、九、みやこ新報による

米国海軍軍政府布告 第一のA号

南西諸島及其の近海居住民に告ぐ

日本帝国に対し戦争遂行上米国軍は南西諸島及び其の近海を占領する必要生ぜり

且つ治安維持及米国占領軍並に島民両方の安寧福祉確保上南西諸島及び其の近海に軍政府の設立を必要とす

故に本官、南西諸島及び其の近海の軍政長官米国海軍少将ジョン・デイル・ブライスは茲に左の如く布告する事となり

第一条 北緯三十度ノ南ニアル南西諸島及び其ノ近海並ニ其ノ居住

民ニ関スル総テノ政治及管轄権並ニ最高行政責任ハ米国海軍軍政府ノ権能ニ帰属シ軍政長官トシテ本官ノ監督下ノ部下指揮官ニ依リ行使サル

第二条 日本帝国政府ノ総テノ行政権ノ行使ヲ停止セリ

第三条 全住民ハ本官又ハ部下指揮官ノ公布スル総テノ命令ヲ敏速

ニ遵守シ米国軍ニ対シ敵対行動ヲ為サズ且ニ不穩行為又ハ其ノ程度如何ヲ問ハズ治安ニ妨害ヲ及ボス行動ニ出ヅ可カラズ。如何ナル者ト

雖モ本条ニ違犯シタル者ハ特定軍事法廷ニ於テ定罪ノ上其ニ判決ニ從ヒ死刑又ハ罰金、禁錮、其ノ両刑又ハ他ノ刑罰ニ処セラル可シ

第四条 本官ノ職權行使上其必要ヲ生ゼザル限り居住民ノ風習、宗教、信仰並ニ財産権ヲ尊重シ、現行法規ノ施行ヲ持續ス

第五条 本官又ハ本官ノ命令ニ依リ解除サレタル者ヲ除ク総テノ官庁支庁及び町村又他ノ公共事業關係者並ニ雇傭人ハ本官又ハ特定サ

レタル米国軍士官ノ命令ノ下ニ其ノ職務ニ従事ス可シ

第六条 占領軍ノ命令ニ服從シ平穩ヲ保ツ限り居住民ニ対シ戦時必要以上ノ干渉ヲ加ヘザルモノトス

第七条 爾今布告規則並ニ命令ハ本官又ハ本官ヲ代理スル官憲ニ依リ逐次發表サレ之ニ依リ居住民ニ対スル我要求又ハ禁止事項ヲ明記シ各警察署並ニ部落ニ揭示サル可シ

第八条 布告ハ以前ニ發表セラレタル事ヲ有スル故ニ沖縄島ヲ除イテ本布告ハ北緯三十度ノ南ニアル総テノ南西諸島ニ適用ス

第九条 本官又ハ本官ヲ代理スル官憲ニ依リ發布サレタル本布告、他ノ布告並ニ命令又ハ法規等ニ於テ英文ト其ノ他ノ訳文ノ間ニ矛盾

又ハ不明ノ点生ジタル場合ハ英文ヲ以テ本体トス

一九四五年十一月二十六日 南西諸島軍政長官

日僑帰還携帶品弁法の抜粋を書いておく

第三条 帰還帰国ノ日僑（帰国日僑の簡稍ス）ノ携行荷物は一人一担トシ自ラ運搬シ得ルモノニ限ル其ノ種類数量ハ左記各款ノ規定ヲ超過スルコトヲ得ス

(甲) 洗面具類 洗面器一個、含嗽用コップ一個 石鹼箱一箱

タオル一本 歯ブラシ一本 練歯磨一瓶 化粧品若干

石鹼二個

(乙) 寝具類 綿入布団（掛布団又ハ敷布団ヲ問ハズ）二枚

枕二個 布団カバー二枚 蚊帳一張 胡座一枚 毛布二枚

(丙) 着物履物類（男女共身ニ着用シ居ルモノハ除外ス）冬着三着

夏着三着 メリヤス一枚 オーバーコート一着 サルマタ三枚

シャツ四枚 短靴下三枚 長靴下三枚 チヨッキ三枚

毛糸上衣一枚 寝巻一枚 レーンコート一枚 ラシヤ帽子一

個 手袋一組 下駄二足 皮靴三足

(丁) 炊事具類（以下焔炉ノ外銅鉄精神ニ限ル）釜一個 鍋一個

焔炉一個 金杓子一本 火鉢一本 柄杓一本 野菜切包刀一

丁 杓文字一本

(戊) 日用品類 万年筆一本 鉛筆一本 ペン一本 毛筆一本 赤

インキ一瓶 藍インキ一瓶 腕時計（或ハ懷中時計）一個

眼鏡二対 マッチ五箱 粗紙二束 煙草十包 魔法瓶一個

鏡一個 櫛二個着物ブラシ一個 図書若干

(己) 手荷物類 トランク一個 手提袋一個 バスケツト一個

(庚) 薬品類（一週間ノ使用ニ足ルモノニ限ル）内服薬四種 外用

薬二種 ガーゼ若干 絆創膏若干 綿布若干

(辛) 食糧航行期間中二日分以上の食糧ヲ携行スルコトヲ得

日僑ノ携行品ハ二回分ニ分チ船ヘ運搬シ又ハ苦力ヲ僱用シテ運搬スルコトヲ許サズ但シ老人廢残者病患者又ハ幼児伴レノ者ハ斟酌ノ上代理運搬シ認メ幼児アルモノハ稍々多クノ物品ヲ携行スルコトヲ得。

日僑私有財産処理弁法

1、郵便貯金帳

2、銀行預金証拠書類

3、保険書類

現金千円以下（各人）

台湾境内の銀行預金は預金者名義宛に關係銀行より台湾省接收委員會日産処理委員會に代つて証拠書類を發給するものとする

本省引揚げの日人は明細書各三部作成すべし（各区郷鎮の責任者に配布して使用せしむ）

日人財産接收は引揚期日の五日前に行ふ

銀行は当該日人に領収書を發給する

五月二十日

此の頃はどうして、かわからない程よく迷ふ

それにつけて思ふことはルソオの懺悔録の一節である

「私は二十を過ぎて一になるところであつた。齡に相應するだけの才氣は發達してゐたが分別はいまだ進まなかつた……世間をも人間をもしらなかつたからである」

孔子の如き聖人ならかうした乱世においても迷はないであらうなんて思ふと

今日はひねもすかう思ひながらくらす。

四月二十一日

高松宮宣仁親王殿下引揚者援護事業御視察のため御成遊ばさる
背広服の平民的御姿に胸せまる。

四月二十二日

官公吏帰国申告者を県庁内の総督府出張所員に提出す。

(北斗郡式四五九)

住所移動の際は直接左記へ通知を要す

東京都麹町区霞が関

内務省内台湾総督府出張所長

五月十三日

来る十六日を期し厚生省援護局から県庁へ事案を引継がれるので集
団疎開や縁故疎開をすすめらるゝので今日は伊敷宿舎を出て新屋敷
町一五六(四区二班)にバラツクを五百円で手に入れ引越した。狭
いながらも楽しい我が家と軽口も飛び出る。

余は曾つて丹下左膳で馴染の風来坊蒲生泰軒に似たりとて大阪浦江
の貧乏長屋にゐた二十頃既に「泰軒先生々々々々」と愛称?を奉ま
つられて得意になつてゐたがトンがり長屋ならぬ空襲生々しいバラ
ツク村に来てその頃を追ひ実に微苦笑を禁じ得ない。

富雄叔父の友人杜富夫氏の肝入でこれでもまあ手に入つたが多くの
引揚者達はねぐら求めて毎日のやうにうろつき廻はつてをる。今更
ながら持つべきは親戚や知己と思ふ。

鹿児島市民の端くれに加はつた今日特に書いておきたいことは西郷
さんの銅像と電車だけが昔を偲ばすもので他は殆んど見るべきもの
がないといつても過言でないことだ。復興作業の汗と桜島の灰とで
真黒になつてをる男たちがある反面に娘たちはフラツパばかりのや
うに見える。

「乙女等よ戦に敗れたりとは言へ御身等の清き貞操を守り抜け頼む
【丸に十の島津紋が書き込まれている】神風連」
など、貼紙をされる程になつてをる。

男と一竿には洗濯物さへ乾さなかつた鹿児島情緒は何処にも見えず
温みも雅やかさもない豚のやうなタイプの洋装婦人なんて寒心に堪
えないものばかりだ。

「おまんさあとてのんさるけやすつたい人が兄ちよんではづかし
うごわんさあを」と昔のなつかしさを遺憾なく現はして自愛し
つ、伸びて欲しいもんだ。

五月十四日

配給□係で市役所や町内会事務所へ行つたついでに郷里へ帰還希
望申告をなす。

五月十六日

昨日炊事場を春里氏の加勢で造り、えらく広々なつたと悦に入つて
るところへ思ひがけなくもビルマから義弟米丸が帰つて来た。

五月十八日

今日は後の世の語り草に

すべきを延期になり三十一日員林国民学校に塩糖会社の汽車で運ばる。

かうして第十七大隊第一隊(北斗、員林、竹山、新高の四部)となり宿営する、

(もつとも都合上竹山新高両郡は二水に集合したが)

四月二日午前一時宿营地校舎集合

一時三十分出発

三時員林駅ホーム入り

三時五十分乗車開始

四時二十分発車

なつかしまる、地を離る、につれ、わけ知れぬ熱いものがこみ上げ
る。

基隆岸壁に着くや直ちに検疫を了へ倉庫に宿営

今朝は未明の四時起床所持品の検査準備 八時半より中国陸軍少将
一行の検閲を受く。緊張して待った我々に、この何? 柯? か総司令
とかいふ御仁のにこやかな顔は非常になごやかな気持を与へられ
た。

黒眼鏡の下からあざやかな日本語で「台中は荷物の制限がないこ
と分かつてをりますか 荷物が少ないやうですねー。布団はどうし
て皆の分ないんですか 日本内地は寒いのに…」など、言はれるの
ではろりとなる。ほんとにこんな有難い言葉をかけられるなんて夢
想だにもしなかつたのだ。この時ふと余はかつての維新政府要人王
克敏を思ひ浮べた。黒眼鏡のせいではあるがほんとによく似てをら
る、気がした。それから男は男、女は女で身体やら物品の検査をう
けたが気を悪くして点はなかつた。厳しい取調べであらうことを予

期してゐたゞけにたゞく 中華民国人の偉大さに感激させらる。

余をしらべたのは二十歳をさして多くこえてはゐない下士官だつた
が日本語で「家族は何名ですか」と問ひ、また襦袢やツボンのポ
タンやバンドを脱さうとしたら「かまわないく 脱さんでよろし」
と至極親切だつた。中国の人々に対する日本人の認識を是正する必
要ありだ。

四月十五日

四日 V三〇号に乗船基隆出帆

八日 紀伊田辺港入港

九日 下船田辺宿営

十一日 田辺駅発小雨そは降る中に桜やつ、じの満開を賞す。

沿道到る処麦伸び、七五手間人畜の住み得ざる地なると聞きし原子
爆弾の跡広島市にも人の往来しげきを見 今更ながら流言蜚語の如
何に人を惑はすかを知る。

田辺は婦人会の湯茶接待の外に誰れもが「皆様御苦労さまでしたく」
とのもてなしあり 奈良京都又同じく広島は市役所吏員の挨拶などあ
りたるが九州線は門司を初めとしてかへつて我々より煙草をせびる者、
物を法外なあたひで売り付ける者 駅員の制止もきかず我等の車両へ乗
込んでくる者等々で誰一人として御苦労さまでしたの声も聞かず。
近畿中国筋にくらべ九州人に人の心の温さを見出し得ざるを遺憾と
す。

十三日 鹿児島着 元第四五連隊兵舎(伊敷宿舎)に収容さる

十四日 村田秋太郎氏訪問。思ひがけなく富雄叔父等とも対面す
さあ何時になつたら島へ帰れる?

満洲ではないソ連と中国がごた／＼してるとかそれにつけて思ふは中国の共產化問題だ。しかし之は簡単には行くまい

何故なら民国十七年以来国民党の共產党に対する破壊の宣伝が全国に浸潤して有産階級が蛇蝎視してゐる上に無産階級の大部分もみな事なかれ主義の症が多いしまた民族意識の高潮は共產思想と一致出来ずそれかといつて内乱は民衆も望まない。よく終戦前までは抗日排日といふことを聞いたが抗日は日本の侵略に抵抗することで排日は日貨排斥を意味するだらうと思ふが、そうだったら排日と抗日とは関係があつても行動は必ずしも同一ではない。抗日は軍事的な行動で侵略が止めば抗日も止むはずで排日は経済的の意味が多く軍事的侵略がない時でも起り得る。しかし排日抗日を日本人自ら仰々しくいふことはかへつて中国の民衆に妙な考へを起させる。余はかうしたことを言ひもしないが考へもしない。

こちらへの引越しは李瑞香氏と胡新者氏がわ／＼牛車持参でやつて来られた。人間は感情的動物である。古今東西例外あるべき筈はない。まして台湾は地理的にも歴史的にも文化的にも人種的にも近縁であるそれが睨み合へば天命を無視したことになるであらう。

三月十八日 星期一

北風ばかり夜を日について吹いてゐたのが今日は南風になつた。胡新者氏のたつてのすゝめに甘諸貰いに行く。思出の川辺部落をここへ来てから初めて充たのだが心なしか不気味な色が漂つてゐた。時が時だから以前のやうに漫然と情緒や気分の満喫ばかりで満足出来ないのが寂しい、

あちらにゐた時は余の髯は伸びほうだいだった。農作物と伸び競へ

をしたわけではないが働くことに心根を傾けつゝ、折にふれては髯の歴史を調べたこともあつた。今は剃りたての顎を物足らぬ氣で一寸さわつてみる。

昔は髯を神聖とした時代がある。エデンの園では人類の祖アダムが髯があつたといふのでユダヤ人は髯を神の賜として崇拜しアングロサクソン民族は他人の髯を害したら損害賠償金を支払はせロシア民族アイヌ民族などにも類似の掟があつた。

我国でも同様の掟が須佐之男命の伝説にある。本来我国では髯を尊び、自然のまゝ、生やし放題だった。

平安朝以来唐乃文化により剃るやうになつた。荻生徂徠の「南留別志」にも男の髯を剃ることは男風盛となりて眉を作り薄化粧せし頃よりのことなるべしと記してをる。敦盛公や牛若丸をみれば理解されるわけだ。しかしこれは公卿階級やそれを真似たものだけの話で武士は依然髯を尊びないものを卑む風習があつた。

この傾向は徳川中期まで栄へたが元禄時代に至つて一変し、野暮な髯は俄然排斥された。ところが明治以来洋風が入ると共に復活した。

四月三日 星期二

三月二十六日日僑互助会より連絡員(西田貞礼君外一名)が見へた。ゆつくり帰るつもりであつた余も旧に帰国準備をせねばならなくなつた。

あはたゞしく準備し接収関係などのため寄留籍を有する竹塘へ引揚げたのが二十八日、神里新太郎氏(沖縄県島尻郡南風原字神嘉山出身国民学校訓導)方に泊めて戴き29日夕刻隊伍編成のため溪州へ出て畠義市氏(笠利村出身)方にお世話になる。三十日員林へ集結

その中でこれは記憶の誤りかも知れないが参議経盛公の御前であの須磨の嵐で忘れ得ぬ敦盛さんが犬と書かる、際大の字を書き過ぎ点を打つ余裕がなくなつた。そこで点を父の膝に躊躇せず打たれた。経盛公は非常にその覇気をよろこばれ「それで生き抜け」と言はれたといふのがある。余も美坊に親父の負け惜しみからではあるが「紙袋貼つても心に曇を貼るな」と言つてやつた

夕刻大城で曾つて給仕として使用してゐた寥水成君がわざわざ尋ねてきてくれた。

そしてしばしは涙さへ浮かべてゐたが美坊に四十円握らせて帰つた。

多くの日本人が個人接収に恐々としてちまこまつてるとき余一家が何等変りなく敬愛され同情もうけ安らかに暮せることたゞ／＼感激するばかりだ。

二月二十五日 星期一

午前中苗代番をなし午後耕作談合のため蕭炮氏方を訪ふ。

種々もてなしを受け土産物も頂戴す。陳鴻謙君夕刻来宅「村民の指導は師玉伯を手本にしてやつてゆく」など、語る。

二月二十六日 星期三

此処も彼処も日本人の住家はこれから入込みとする本省人が門標を打ち付けてゆく。余の家庭も王切寮の林金鐘なるもの来たり釘を要求したるも余笑つて応ぜざりしにより隣家の徳永氏がたより持ち来たつて打つ。数刻後代表者三名見え「師玉さんと知らずにやつたことですから許して貰ひたい」と言ふ。しかしやがてはやつぱり

一般日僑と同じく彼に渡してやらねばないと思ふ。

三月五日

けふはみんなが涙を飲んで引揚てゆく。二千六百年の歴史に曾つてなかつた姿だ。

あの家もこの家も内も外もいろ／＼と取り散らされてゐる。緒の切れた下駄草履牛足のとれた人形、壊れた鍋釜、使い古した鋤鍬、破れたザル等々々、そのすべてが人間生活に縁の近いものだけに一層の哀愁感がある。

かうしたことはこの川辺部落のみでなくどこでも同じであらう。実に人間の港だ。海に港に潮のさし引きがあるやうに此処にも眼に見えない人間の満潮、ひき潮がある終戦当初まではこんな生き死にの路があらうなど、は誰一人として考へてもをらなかつた筈だ人間の港の測り知ることの出来ない浪の動きは思ひも寄らない運命の端ばしを秋津一帯の砂の上へ打寄せた此処は砂丘なるが故に山は高くなつてみたり低くなつてみたり次から次へと形を変へてゆく。季節風の仕業なのだ海辺に干満の潮に乗つていろ／＼の物が流れ寄るやうに日僑部落の今日のどよめきは潮騒と言へる。

三月十七日 星期日

五日に全部が引揚げて翌六日余一家は草湖の陳正氏方に引越す。余の理想たる日台人の融和結合を身を以て促進したわけだ。余は余の胸に溢れる愛が指示する処に向つて邁進する結合の前には融和が要せられ融和の前には理解が要せられ理解の前には接触が要せられる此の過程の裡に余の心が溶け入り此処に実を結ぶ。

ふ。

かうして自己の食ぶちを作るための努力が万人を救ふ鍵にもなる。世の中は暗いと思へば暗いし汚いと思へば汚い。しかし心眼を潔めれば明るくもなれば美しくもなる。前途を憂ふる前に先づ食糧の生産をせねばならぬ。作つても／＼荒されるからといって作らねば一たいこれからはどうなる自己の心事を審けばどんなに難しい纏綿たる問題も自ら解決出来るのではあるまいか。個人接収の如き圧迫を次から次へと受けやうとも齒を食ひしづつて堪へねばならぬ。苦しいが無条件降伏だもの移民村の人々よ終戦後の新たな逆境に堪へて行かう：

上御一人は堪へ難きを堪へ忍び難きを忍べと仰せられてをる。

深刻なる人生の寂寞に泣くのが本当ではあるが泣いてばかりゐてどうする。

照る日もあれば曇る日もある。追はれて去る最後の日まで鋤鋤握つて頑張らねば：

二月十八日 星期一

通子親子が塩水へ行くので秀も美坊も見送りに行き今夜は二林泊り。ぼつねんと留守居しながら皆が日本内地へ帰つてしまふて余の親子三名だけが此処に残ると随分淋しいこともあるだらう。同じ貧乏なら何処にをつてもよさそうなもの、やはり郷里でする貧乏なら辛さは違うだらう。

しかし外国での淋しさも味はつて見なければならぬ。力の限り根限り働いてみることだ。淋しさが人生の偉大さを産むかも知れないし弱音をあげてはならない。

秀がわたしたちだけになつたらかへつて本省人とは和やかなつきあひが出来るとせうと張切つてゐるぐらゐだから：

まあ伊勢脇さんの

「増産ノ要旨ハ有形無形ノ各種農業要素ヲ総合シテ氣候風土ニ勝ルノ威力ヲ耕地ニ集中發揮セシムルニアリ」
をモットウとして頑張らう。

二月十三日 星期六

久しぶりにほんの少しばかり雨あり。もつと降つてもらへばどんなにか作物が喜ぶであらうものを。

美坊が「テル／＼坊主」を歌つてゐるので「明日雨にしておくれ」と言つたら変な顔をして余をみながら「天地がひつくりかへつたらねー」といつたのには顔まけた。

午後十一時すぎ長野さんの宅へ三人強盗が現はれたが家人に大騒ぎされそのまゝ未遂ですんだ 部落民総出で追跡したが暗にはどうすることも出来ず取逃かした。

二月二十四日 星期日

折にふれ貼つてた紙袋を秀と美坊が二林に持つてゆき十七円になつたと笑ひながら帰つてきた。

紙袋けふの我が家に秋をつけ

か：美坊にこんなことをさせようなど、とは夢にも思つてゐなかつたのだが

余の美坊ぐらいの頃は祖父の前で手習ひをしながらさま／＼の物語を聞かせて貰ふのが常だった。

二十七戸の寂しいこの日本人部落は明日の労苦を孕んではをるもの、今夜もまた何事もなかったかのやうに大風はよそにして人々は寝静つてをる。ほんとうに草木も寝る丑三つ時といふのにここは何んのことではない。大自然のちからはそぐべくもなく季節風吹きさび木麻黄やガジマルをひききりなしにゆすぶつてをる中を夜警して寂寥のヒタ／＼打ち寄せるのを覚へる。

二月十二日 星期二

今般土地の名称変更せられ左記の通り布告せらる

芳苑郷 公所 布告 芳総字第五十一号ノ一

中華民國三十五年二月六日

芳苑郷長 陳健上

台中県北斗区芳苑郷草湖第三村

(日本統治下 台中州北斗郡沙山庄草湖)

草湖第一村(崙脚)

〃 第二村(草湖) 元草湖第一保

〃 第三村(草湖) 元草湖第二保

中平部落で土地関係のため本省人約二十名襲ひ来たり福田氏殺傷せられしことを聞く。

これにつけ思い起すは曾つて大阪朝日新聞に連載せられたる「大地は微笑む」である。

我々の住む地上には何故醜い争いが絶へないのか。父と子、夫と妻、兄と弟 こうした個々の家庭においてのみならず国と国とが人と人とが相争ふてをる。怨恨、憤怒、呪かうしたことをこの世から永久に葬りたい。

さすれば吾等を育む大地は常に微笑むであらう：

二月十四日 星期四

仔山羊が甘藷検乾場の邪魔をするので縄をつけることにした。

本旧十三日は寒壇爺といつて寒さを厭ふ神を祭り奇妙な行列が出ることになつてをるが此の付近では見られない。

二月十五日 星期五

秀を伴ひ蕭炮氏方でもてなしを受く。

二月十六日 星期六

本旧十五日は上元といひ廟祠はおの／＼堂内に彩灯を点じ家々の妻女は神に詣で年中の好運を祈る。

また夜は廟だけでなく各戸に走馬灯をつるし、種々な動物などの形をした竹骨の紙灯に火を点じ街をねり歩き延延数街にわたる奇怪な提灯行列と化し大壮観を呈することになるんだが殆んど日本統治後はすたれてしまつてゐた。

今年に光復直後であるが何処かでやつてゐるかどうかわからない。

まづこれまでが台湾の小正月までの行事であるが殆んどが神仏の祭事であるところに特異性がある。

かうして平素は吝嗇と思はれる程勤儉蓄財するが祭事には少しも惜しまずこれを投費してはばからないのだ。

二月十七日 星期日

美坊 寿代 絃美と山羊をつれて苗代番をしながらこんなことを思

二月三日 星期日

朝―部落集会 午後―部落青少年演芸会

本旧二日は猪肉鴨肉を供へて土地の神を祭る乞食が「揺錢樹」つまり金のなる木をかついで物乞ひに来る。金のなる木といふのは榕樹の枝に紅糸で錢を通してかけたものでこれをふり廻はしながら門口で「金のなる木がこの家に来れり この家のもの富貴となるべし」など、縁喜のよい言葉を喋り立て、家人の喜ぶトタンに手を出さうといふ寸法で、その戦法たるやさすがは孫呉の国の末流とうなづかれる。

二月四日 星期一 朝霧深く風なし

寿代と絃美をつれて陳義、蕭炮両氏宅を訪れ、後陳喊氏宅でもてなしを受け、どつさり土産物まで頂戴した。

本旧三日は鼠の嫁入りが行はれるといひ伝へられてゐる。それで今夜は早くから灯火を消して邪魔をしないことを心がける……いみじくも粹な心がけである。

鷺鳥雛四羽特別安くしてもらつて七十円で購入した。

二月五日 星期二 風なし

苗代番に美坊と寿代を伴ひ、山羊もつれて行つた。

本旧四日は迎神といひ旧臘二十四日玉皇上帝に朝賀のため上天した諸神はこの日下界に還御するので各戸香燭、牲醴、果物を供へ紙製の馬を焼いてこれを上天せしめ諸神の騎馬に供し降臨をお迎へする。諸神が正月三日まで在天の間は下界に神が居らないだらうな

ど、思つたら大間違ひで神様も悪者の多い下界から目がはなせないと見えて天神本部においてはその間他の天神を下界に下降送還せしめて悪事を行つたものは上帝に報告されることになつてをる。

秀が二林まで出て淵上□さんへ曾て日本刀代として預りたる百五十円(為替番号参四四壺)と日本生命台北支店へ不足分の保険料とを送付す。

二月六日 星期三 稍々風あり

今日旧五日からは開帳と唱へ初売り出しが行はれる この日は平素取引ある店舗の主人などを招き饗応するほか特価大売出しをやる。朝帰還に関する部落集会。午後薪取り。

二月七日 星期四(清水祖師誕生日祭事) 旧6日

里芋に施肥す。現在白米五升百円 甘藷百斤五十円

二月十日 星期日(風なし 玉皇上帝誕生日祭事) 旧9日

蕭炮、陳喊両氏宅訪れ後陳義氏宅に饗応を受く。土地貸下費二ヶ月分(一、二月) 拾四円三拾銭を総代向山氏へ納入す。

二月十一日 星期一

中国へ引渡す日にも立派にして日本人としての最後の美しさを見せねばと思ひつゝ庭園の手入れをする。

深更：半月はぼつかりと中天に浮き星はまばらにまばたきもせず、冬の寒さは熱帯台湾でもやはり弥増する。付近の本省人部落で吠え立てる狗の声も顫へて聞える。

らも喜びを感じる。

昨日あたりから、二、三組共同作業をやつてをる様子だが敗戦後の部落民は殆んど集会々々で小田原評定に日を消してゐた。

議論の時ではない。食ふために否生きてゆくために生産増強せねばならぬ時である。

口では「日本軍は滅んでも日本国民は滅びない国体の護持はポツダム宣言も認めてをる」とは言つてをるもの、誰一人としてそわ／＼しないものはない。

それが伊勢脇さんの御提唱で余等が立ち上がつてから之を見習つてといへば烏滸がましくも聞こえるが皆がより／＼共同耕作をやるやうになつた。

働くことの喜びを味はふべきである。

通子が納秀熊氏を御供して帰つてきたので今後の方針を親しく語り合ふ。

二月二日 星期六 旧一月一日 風強く稍寒し

陳鄱湖氏宅にて美坊 寿代とも／＼もてなしを受け夜は槌田さんと共に李瑞香の弟方にて御馳走になる。

保守的な本省人のしかも光復最初の正月（勿論今までにもなつかしく中国しきたりの迎年法をやつてはゐたが）特にうれしく面白味が出るわけだ。

爆竹一声 除旧歳

桃符万户 更新々

かくて台湾の元旦は緑に映ゆる初日の出とともに明けてゆく。松飾にあたる桃符（春聯）邪氣払ひの爆竹。

歳時記によると「西方の山中に人あり。長丈余。人之を見れば病む。名づけて山□といふ。昔人もしこれに遇はゞ青竹を火中に投ず。竹節炸裂して轟々だり。山□驚きて逃ぐ。役人爆竹を以てこれに代へ邪氣を払ふ」とある。桃符は昔東海索山に蟠曲三千里におよぶ、とにかく大きな桃の木があつてその下に二神あり百鬼人を害するものをとつて虎に食はしめた。黄帝これを徳として象つて桃板をもつて戸上かけ二神を門扉に画いて兇惡を防ぐこと、したのが今の門聯のはじまりで入口の両柱などに目出度い対句を紅紙にかいて貯布する習慣が出来上がった。たとへば

天増歳月 人増寿

春満乾坤 福満門

といふようなところだがこれがまた商売によつておの／＼異なり妓楼の如きは

一隻玉手 千人枕

半点朱唇 万客嘗

と甚だエロ味に富みこれによつてみても接吻がかならずしもアチラの特産でないことがうかゞはれる。ともあれ大晦日の夜更しに未だ夢まどらかなころけた、ましい爆竹の音は元旦の黎明が忽然はじけ出したかの如く響き渡つて年更まれりと告ぐるのだが黎明と、もに茶に氷砂糖を加へ茶菓を三皿に盛り卓子の上におき門口にならべ香を焚き金紙を焼いて三跪九拝し恭しく玉皇上帝を拝し迎年の式ををへ回礼といふのが順序だ。

元旦は平素の喧罵の声もなりを鎮め一家の老幼悉く温恭謙讓一夜にして君子に豹変するのは蓋し日本同様のものの肇めをつゝしむと同意であらう。

を見て思うに四等国民になり精根のありつたけを吸ひとられながら生ける屍のやうな暮しをつゞけるのは地上の人柱といへないだらうか。

地上の人柱 之こそ気の毒な点が多い。

一月十九日 星期六

伊勢脇さんの水稻作計画をきく

苗代準備 一月二十日

種籾浸水 一月二十五日

苗代籾蒔 二月一日

田植 三月十日 (昼間一名雀番)

獲入 七月十日 (六月二十日より昼夜間共二名番)

師玉六名、鈴木三名、西田四名、山川一名、伊勢脇六名

二十名 一日一名 二合五勺 一ヶ月一石五斗

水田最低収獲量三千斤 (白米約九石)

二十名約六ヶ月分糧秣

之れを実行して難関を切り抜けてゆくのだ。

一月二十三日 星期三

椎名、日下部、鈴木、田辺、陳煥村氏等の来宅あり 部落代表も見て昼食をなしつ、四方山話をなす。

一月二十四日 星期四

種籾浸水

三分三厘分 蓬萊 二六斤五

二分五厘分 在来 一九斤二五

八厘分 長糯 一〇斤

余等のこの共同耕作が順調に進むのを喜びつ、如何に人の和の貴きかを知る。

昔漢楚相戦ふこと八年而も七十余度まで楚の項羽の勝に帰したのは実に老范増が側に在つて之を輔けたからである。而るに一度陳平の術中に陥り、功臣范増を誅せんとするに及び天下は遂に日ならずして高祖の手に帰した。嗚呼人心の和の如何に戦争に必要なかよ！釈迦が道端に平伏して象を拝まれたのを弟子たちが訳をきいた。

「あれは象を拝んだのではない。仏を拝んだのだ。あの炎天の下であれだけ重い荷物を背負つて少しも不足らしい顔をしてゐなかつたではないか。あの姿あの心が仏なのぢや」とお諭しになつた。

働くことは尊い。

何の不足心もなく働く姿の中に光明かがやく仏を看る。

一月二十五日 星期五

種籾の水替へは鈴木先生と伊勢脇さんがやつて下さつたので三崎のおぢいさんに分譲して戴いた里芋の手入と甘藷を植付ける。

一月二十九日 星期二

風邪の気分がまだぬけずけふも秀を苗代へやる。

人間の一生には健康あり病あり、実に花咲き鳥歌ふ折ばかりはない。一国の運命にも敗戦といふ大変事がある。

明日からでも少々押切つて苗代へ出て見ねばいら／＼した気分はかない。土としたしみ土と語るとき生きとし生ける者のかすかなが

ぶ。

噫呼何時の日安らかな気持ちになれるやらと憂鬱になつてゐたら陳氏阿梅が香港から無事に帰つてきたとの伝言あり朗らかさを取戻す。

一月十七日 星期四

曾て新民会中央總會宣伝局囑託張城寧氏が：中国人は徹底的に日本を理解せねばならぬ。また日本人は徹底的に中国を理解せねばならぬ「一つの品物を研究するにも縦横両面から手をくださねばならぬ。ましてある国家、ある民族の一面の一部分を見て全部を理解したと思ふのは全く当らない」中国民権の性情あすこぶる簡単でたゞ強靱の二字で概括できると思ふ…といふことを言はれてをるが味はふべき言である。

処々に面白からぬことのみ起きつゝ、あるこの頃国境を越えて美しく結ばれる愛の道を見出し得ないかを深く悲しむ。

一月十八日 星期五

日本人は昔から早熟早老の傾向があつた。

四十を初老といふくらゐだ。先般自殺を伝えられた近衛文麿公の話に「私の先祖は大抵四十すぎには隠居してゐます」といふことだが藤原家は無論のこと封建時代には十五、六才で元服し四十すぎると隠居するのが普通だつたといふ。余今四十にして隠居どころのさわざでなく働きなほさねばならぬ難関に逢ふ。時の流れに抗し得ざる人間の悩みだ。

千鳥啼く内の海辺は孤児の
悲しき唄に日の暮れゆくも

余が十七か八の頃の歌だがやつぱりこの頃が一しほなつかしまれる。

鏡表の内海は平和と愛の象徴だ。

そこでの四十すぎでの生き方はまた単純なものであらう。台湾であらゆる刺激をうける方がどれだけか余の生涯にいゝ結果をもたらずか知れない。余は自ら偉くないことを知つてをる。

けれども自分は立派な者にならうとつとめまた尊いとの信念はある。

椎名兄が見えた。時局談に花が咲き特にソ連のことゝも話合ふ。

我々が巡查を拜命した頃のソ連は都会にはネツプマンと称する新成金があり、農村にはクラークと称する資本主義的要素があつた。これが無産階級独裁政治に対して脅威を与へた。それで之を弾圧したところがネツプマン（小売商人）は段々なくなりクラーク（農民でありながら農民仲間を搾取したりする階級）は税金を恐れて牛を殺し作付反別をへらしたので食糧は払底した 現今の台湾に稍々似てをるが日本内地もこんな風になりはしないだらうか。しかしソ連の今頃はどんなか知らん。

これにつけてわけても思ふことは

物言はじ父は長柄の人柱

雉も鳴かずば射られざらまし

と「古今集密勘」に伝えられる汚れなき人を捧げて妖災を免れる人柱のことである。

この長柄の人柱は実に血涙の哀史であるがしかし人柱は果して弘仁年間のみのことで地下ばかりに限られるといへるであらう？

「働かされば食ふべからず」のソ連の姿は別としても敗戦の憂き目

8、正業 〃 用ひられる
9、有産 〃 重ぜられる
10、共栄 〃 和する

一月十二日 星期六

毎日乃やうに日僑はよるとさわると帰還の話でもち切りだが余の揺籃奄美島は一体どうなつてゐるだろうか。

これにつけ思ふは一昨年十月十一日十四時三十分の大本営発表である

十月十日七時頃より十五時三十分ノ間四次二亘リ敵艦隊機延約四百機南西諸島中ノ沖繩島、宮古島、奄美大島等ニ来襲セリ。

所在ノ我部隊ハ之を激撃シ、ソノ二十六機以上ヲ撃墜セリ。

我カ方地上及船舶ニ若干ノ損害アリ

丁度この頃米国の伝單が台湾に散布された

一機でも

この標語の下に軍閥は飛行機の生産を奨励して居る。併し「一機でも」では足りない何故ならば米国では昼夜五時間毎に一機造つて居る。真珠湾攻撃以来米国では十七万一千機造つた。これは米国での七機に対し日本は一機の□である英露も毎月何千となく作製してゐる。

日本は此の生産力を如何にして対抗し得るだらうか軍閥はこの生産力を知りながら米英を攻撃したのである何故こんな馬鹿なことをしたのだらうか去る五月二十九日内閣顧問及び三菱電工業株式会社長郷古潔氏は「制空権は勝利への原動力である」と言はれた。米国はこの制空権を握つて居る。諸君の指導者は陛下の命令に背い

てまでもこの絶望的で無益な戦争を初めたのである。諸君は本当に気の毒である「一機でも多く送れば送るほど破壊されるのみ」

SERIAL No403-

やつぱりこれは本当だつたかも知れない。

一月十三日 星期日(午前三時三十五分地震あり)

あれやこれ萎む心を覚えて、

今朝も夜警を終へそし帰る

明日ありと思ふは不安と恐怖と苦痛の種だもう二晩も岡崎さんが本省人に招待されてから帰宅せぬ。部落民も時が時だけに、ことは考へられぬと言ふ。此の頃眼に映じ耳に聞くものがすべて技巧と虚偽のどうにもならぬ事ばかりに皆の気がいらだつてゐるのは否めない。ほんとに生きる苦しみは昨日まで、おしまいになつてくれたらどれほど嬉しいか知れないのに……

一月十五日 星期二

昨日の日僑調査で第一種「未經征用乃警官」として申告したが余の在職中(去年三月頃)彰化の西門市場で

連鞭要換頭家 大家不免打傾

聽て主人をかへる(米国人の統治になる)から皆働く必要がない

万事対一子打起 彼時大家即打傾

今後凡て一からやり直しになるから其時一生懸命に働けばよいこんなことを言つた者があつたとの通牒をうけたことがあるがほんとに幾ばくもなくして世はかうなつた。

此の頃も信をおけるものおけないものもいるとりどりにデマ乱れ飛

自己

土地公を唐国人に呼びなされ

初日うらゝに照るぞ嬉しき

近隣の仁

日僑の明日を定めぬ土いちり

初日に靄の掩うぞ悲しき

一月三日 星期四

少しばかり地ならしをする。

午後六時半より部落の青少年たちの演芸会あり賑ふ。由来台湾は民生擾乱争闘を好む伝統的気風があるから何時迄こんな和やかさを保てるかを思へば一抹の哀愁をももようす。

一月四日 星期五

日本人帰還申告書提出

一、帰還先 本籍

一、現在ノ生計概況及病者ノ現況

銀行預金 二千元 農業会貯金 五百円

手持ち金 五千元 現在 収入ナシ

支出 月五百円

一、帰還旅費ノ有無 有

一、帰還後ニ於ケル生計予想 予想立タズ

一月十日 星期四

昨夜で二回目の夜警番がまわつてきた

八洲村の人々は殆んどがこの川辺へ逃げ込み毎日のやうにふるへおの、いてゐる。

敗戦国民の実にも憐れな姿である。

どんな苦勞にも負けない

どんな辛抱でもする

雨乃日も風の日も又は夜業までもせねば食ふてゆけない百姓達の気苦勞がどんなものであるかはお役人たちの想像の届く限りのものではないのである。地主と豊かな自作農だけが利益を保て救はなければならぬ貧農達はあくまで苦しまねばならぬのだと言つたのは平和時代のことだが現在にはこれに数倍十数倍数百倍もの苦痛がおしかぶさつてをるのだ。

明日の生命さへも分らない人間ばかりだ。

あれを思い之を思ふ時余もまた明日のことは語れない気がする。

一月十一日 星期五

秋津村指導員猿渡城人さんが左記のやうなことを移民たちに強く叫ばれ実践にうつしてこられたが今にしてつく／＼考へさせられる。

母国人の心得

1、信念 なければ 敬われぬ

2、高潔 なければ 卑しまれる

3、礼儀 〃 侮られる

4、信義 あれば 信用される

5、仁愛 〃 親まれる

6、遵法 〃 乱れぬ

7、健康 なければ 頼られる

川辺部落に住家決定す。

十二月十一火

同僚たちの手伝ひで転居準備整ふ。椎名勲兄の招待を辱うす。

十二月十二日

早朝日下部謹男兄の饗を戴き二林を引揚ぐ。

これから余は南洲翁の「敬天愛人」を念頭におき生きて行くのだ。

蕭抱、夢在民兄弟道具運搬に特別の配慮を払ってくれる。

伊勢脇武男兄の饗宴を辱うす

十二月十三日

今日も一日中伊勢脇兄のおもてなしにあづかる。

家財を取まとめつゝたゞ感涙にむせぶ。

十二月二十三日 日曜

人の心にいつくまでも食ひ入つてをるものは小学校の頃の運動会であらう。余の心を打つものもまたまさしく之だ。

運動会といへば少年の日の姿、あの揺籃の地の山も海もがまざくと眼前に浮ぶ。もう此の頃は少年の日の記憶は大部分雲烟模糊としてをるが其の中から呼び起し呼び醒ますものはやはり運動会だ。秋津国民学校で自活復員軍人と児童達の運動会があるので皆が嬉々として出てゆくのを微笑ましく思ひつゝ留守居をする

国破れて山河あり。四等国民にも運動会あり。つらく観するにたゞ感無量。

十二月二十七日 木曜

一昨日美坊をつれて塩水に通子親子を迎へに行き今日はその帰り、塩糖線田中駅に汽車を待つこと実に四時間半、やうやうにして思ひがけなくバス来つて乗る。

盛者必衰の理を深くしのぶ。

十二月三十日 日曜

今度は正月が来ても餅の一つもあるか知らんと思つてゐたが結構餅もついた。

やつぱり廻り来るものは来はするもんだあ。

十二月三十一日 月曜

大晦日もかねてはあやぶんでゐたのに案ずるよりは生むが易いをするのまゝ、呑気に川辺部落で迎へることになった。

停職がかへつてゆとりがあつていゝ。ほんとに今年といふ今年ほど種々の造語蜚語が毎日のやるに變つては伝はつた年はないだらう。風呂を沸かしたり、炊事の手伝いをしたり給仕のおらない此の頃は四十男も台無しながら楽しみもまたその中にあることはある。

城地百戦後 耆旧幾家残

処処逢蒿編 婦人掩淚看

この唐詩選の一詩は支那の良民の哀しい気持であらうが現在では日僑がこの気持で正月をも迎へ送るであらう。

一月一日 星期二

「兄さんこそ馬鹿よ!」

「何を…」

こぶしを振り上げたとたんに眼が覚めた。

蕃地の奥深く夜はしん／＼と不気味に更けて蕃犬の遠吠えのみがすすかに余韻を引いて聞こえてゐた。そのあくる夜は名物の霧深くとざし暗い嫌な気持ちにとざ、れる夜だった。

寝られぬまゝに明日の警備の有様がどう変わるかを傍の友々と語りゐた時けた、ましく電話のベルが鳴った。

「師玉くんかい! 今君に電報が来たんだがね—読むから聴いてくれ—落ち着いて聴いてくれよ…」

警察課からの電話でヤエの死は知らされた。

「どうも御気の毒です…老少不定といひこれは人の手ではどうにもならないことなんだから気を落さないやうにね—ではこれで失礼するよ。電報は明日の交通で送ります…」

「ヤエよ許せ!」心中で詫びを言つた。

そして

「昨夜は別れに来たんだつたね—やつぱりお前のいふ通り兄は馬鹿だよほんとに大馬鹿者だよ」とつぶやいた。

一一、敗戦日記

十二月六日

夕刻「明日より出勤するに及ばず」の命を受く。八月十五日終戦し先月中華民国より接収をうけてから今日あるを期してゐたので何等驚きもせず淋しさも感じない。

たゞ来る日の来たことのみ思ふ。

あの日から昨日は彼処で今日は此処で警官(日台人を問はず)が殴打され、保安林や路傍樹は目もあてられぬ迄に乱伐され、果てはまた強盗、傷害頻々として文字通りの百鬼夜行たる中に余は大手を振つて今日まで歩いてきた。

十六年間の警察渡世で本省人に馴染多く、そのためにあらゆる階層の余にむけらる、好意の現はれである。

これから日僑として余はまた何れの地にあるものまゝの姿を持ち続けるであらう。

この年は早く暮れろよ我が前に

あらたまりぬる世界地図来ぬ

切り払い防風林の蔭もなし

いつか二林は名ばかりにせん

砂まじり雨戸ゆすぶる折に乃

風の音こそうらまれにけり

十二月七日

秋津村指導所に猿渡指導員を訪問住家の兼につき懇願す。

陳煥村、山林君兄弟大いに力□を入れてくれる。

田辺公医さんの饗応を辱うする。

十二月九日

今般の第一回整理組全部原分室主任方にて饗応を受く。

十二月十日

今からでは遅いと叱つてくれるな。
否うんと叱つてくれよ。兄は喜んでお前に叱られながらもお前について行く……。

二、妹よ許せ

ヤエはまたしても庭先の大手水鉢にもたれて小さかつた頃の思出を追つてゐた。

そして台湾なんて遠いところへ行つてしまつた兄を千々に乱れる小さい胸に呼びつゝけてゐた。

「今年も兄さんは御帰りにならないのかしら……たよりさへ下さらない兄さんだもの……もうわたしのことなんか忘れてをられるんだわ……いやそうぢやない。そんな兄さんぢやないわ……きつとくおしごとがお忙しいからなんだわ……」

自ら問ひ自ら答へる可憐な少女の顔はとめどない涙に濡れるのであった。

「お母さんでもいらつしやれば……」

その母も今は自分たちの母ではない。また母がゐたとてだまりこくつてゐる兄のことである。

何も言はずに出て行つた兄である。

哀しみの幾年かはすぎて十九の厄年。

日にく痩せ細つて病の床に伏す身となつた。

その頃合には霧社事件の討伐隊の一員だつた。

明日をも知れぬ人である。

「兄さんはきつと手柄をたて、白木の箱に収まつてわたしの元へ帰られるんだわ。兄さんにたつた一目でもおあひしたいけど……それは

我儘……そうだわ、わたしが身変りにならう……そしてく兄さんはもつとく長く生きられてお国の御役にたて、あげねばならないわ。わたしなんか何にもならないんだもの……このまゝ、あの世とやらへ行つて兄さんを御守りして上げよう……」

かくして幸薄き少女の生命はちぢめられて行つた。

「兄さんの意気地なし……」

「なんだつてその生意気な口振りは」

「でもわたしをおいてけぼりにして兄さん一人で遠いくところへ逃げたんでせう……」

「それはお父さんの意思を継いで立派なひとになりたかつたからぢやないか……」

「けどちつともえらくならないぢやないの……」

「若いときにはいろくあるからね——それで今までは兄さんも見事失敗ばかりだつたんだ」

「兄さんはやつぱり御里に居られた方がみんながよくみて下さるわ」

「然しそんなことお前が心配せんでい、兄さんは兄さんとしての考へがある。お前もやがて嫁にゆかねばならぬ。兄さんのやることもよく見ておけ……」

「どんなことみておくの……」

「男の世界はいろくなことがある。つまりどんな仕事でもときには浮き沈みすることがある……」

「わたしにはわからないわ」

「だからよく兄さんをみてをれつてんだよ……」

「でも兄さんともお別れよ」

「別れる？そして何処へ行くんだ馬鹿！馬鹿者！」

有才兼有能 雖建事業、因不能御示、
内外之患 辛苦難免 或有官利、
或自身与疾 或少失怙恃 或寿不永

壽代 名二十二凶 ヒデニ全シ

総二十八、凶 一生無衣祿、雖亨降伏 或有官利

絃美 名十八 吉 秀康ニ全シ

総二十四 吉 余に同じ

曾つて大阪在住の頃浦江の聖天さんのオミクジに(昭二、一一、二〇
日記による)

陰黷未能通一たとえば今分にては夜のいまだあけざる如く憂いもだ

一 ゆる事のみ多く

求名亦未逢一て気をいらつぽおもふようにゆかぬなれども辛抱して

一 次節をまてば、

幸然須有変一ひよつとしたる事よりよき芽たちて、かなしみもよろ

一 こびにかはる如

一箭中雙鴻一き仕合あり一本の箭にて二つの鳥を一時に得る如き幸

一 運来るべし

こんなことも出てをる。

一〇、兄の道

一、ヤエを思へば

もう母親はなし、またその母にもまして兄をいとはしんでくれた妹も余を去つて了つたからは兄もこのうつし世に長らへてゐることはたゞ／＼苦しみを増すばかりである。

ただ真白に／＼咲き出でんとして芽をふいた白百合は蕾のまゝで危うくも落ちてしまつた。

こんなに早く終る宿命だつたら何をほつておいてもみてやるんだつた。愚痴ではあるがかうもしてやりあゝもしてやるんだつた。

又例え何もしてやれなかつたにしろせめて臨終の際に手を握つてやりたかつた。

兄はお前が優しい気立の子供だつたことをよく知つてをる。

今兄の手元に残つてゐるものは幾通かの手紙のみであるが折にふれては手にするとき再びおとづれて数をふやさなければいけれどお前はやはり今尚生きて兄の胸にある。

祖父母も父にもお前たちにも何一つくし得なかつた兄だ。

これからはせめてもの生前の罪亡ぼしに仏の供養に世を送るのが兄の努めであると思つてをる。

太平洋に暗雲漲りをするとき何たることだエゴイストだと笑はれ罵られてもいゝ。お前の大きくなつた姿さへ知らない兄なんだもの……

幽明を異にして十余年其の間ゆきづりに見る年頃の娘さんたちにお前もこんなになつてたであらうことを思はざるときはなくまぶたの裏の熱くなるのを覚えることもまたしきりだ。

もうまさに兄も四十になん／＼としてをる。

お前の元へ帰つて墓参りに日を送つてもいゝ年である。

お、ヤエよ。

お前が待ちこがれてゐた兄はきつとお前の元へ帰つてゆくぞ。

ある。

内申孝直で信用は相当に得られるが強い感受性を持つて居るため、善悪の何れにも極めて染み易い傾向がある。

欠点としては、周到である割合に一つのことを最後の完成迄成し遂げる事が出来ないで途中で他に走る傾のあるのは惜しむべきである。

多血質であるから平常は大変冷静であるが、色情の点になると興奮して盲目的になり易い。多情多感に走り過ぎて往々失敗する。常に過去の事を考へたり将来を心配したりあれこれと取越苦労が多い。

又人に不都合な行為があると何時までも気にしていると云つた反面があるが、或程度の樂觀は必要である。

青年期より中年時代に至るまで以上の諸点に注意して専心自己の転職に精進せば、必ず成功を収める事が出来る。かゝる貴下の運勢は、長年月に亘る姓名の暗示が、貴下の性格を作り、運勢を作つて来たからに他ならぬ云々とある。

これより外は世の鑑定書を別途添付するとして家族を二三拾つてみる。

義秀 名二十

凶 才勢力不足 遇事寡断、不能主持之把握之財幹 或災□怙来或少失怙恃 或寿不永

総三十五 吉帶凶

有些才能、奈無権力、晩累困難

秀康 名十八

吉、利路亨通 権力勢焰、今聞令望 名利両全

総三十三 吉

東来紫氣 安享富貴

ヒデ 名七

吉 有尊嚴態度 兼有独断之権力 不恂外侮内患 竟能成功

総二十二 凶

所謀不遂、毎多困難 或旅行外国 一旦成功。

アツミ 名八

吉 進退能自由 有名誉知廉恥 事業竟得成功

総二十三 吉

位尊望隆 所謀如意

有志者事竟成也

米丸 名九 姓六、家声克振、富豪門□、□心淑巧

凶 余に同じ

総十五 右全

通子 名十三

吉 文武兼能 膽略過人 雖有困難之事終兆為患 意成富豪

総十九 凶

んだといふ、その同心を何時々々々までも持ち合せをる叔母の朗らかな生活が羨ましい。

九、うらない

当るも八卦あたらずぬも八卦と軽き、流してゐた易者の言葉が不思議にも不気味な力を持つて身近にせまってくるのを感じた時、事実余は心の動揺を禁じ得ない。(別紙姓名鑑定書参照)

曾つて竹塘庄牛稠子の醒靈宮屈守に祈禱を願ひたるに「第一号」の籤現はれたるにより「漢高祖入関」に似たりとて左の如き説明を加へられたることあり。

第一号 漢高祖入関

漢高祖姓刘名邦字沛人也其時。秦法苛暴天下背叛楚人項梁起義立懷王孫心高祖卒沛中子弟以從諸侯兵皆西響く攻秦約以先入関者王之独高祖先入秦関除苛法与父老約法三音秦民大悦秦王于嬰素事白馬出軹道以降

巍々独歩向雲間 玉殿千官第一班

富貴榮天付汝 福如来侮寿如山

圣一功名遂 福祿全 桑麻孰 婚姻聯

意一訟得理 病即瘳 孕生子 行人還

東一雲間独歩 拔卒□群

坡一名登甲第 奚止功勲

解一終身先顯 皆天所相

一祿厚府高 意稍謀望

碧一月裏□丹桂

仙一成名歩玉幾

註一万事定無疑

此籤謀望通達無不遂意但各有所至官員占之□援之喜。士人台之有功名之望

庶人不吉

若謀□求財者、自名無実為諸多虚空也

□ 兩句顯仕者之進身出玉殿千官之上寿山福海皆天所付不可易得 個不王占得此者勢如騎虎降得者自降 降不得者及被所傷千官戒作仙官。

一、士人問功名占此自謂兆会即狀久面科第会試殿兩科通傍序関皆第一授官山東如懸歷州明道以至撫台皆不□山東応在来句。

師玉厚の二十四画は「天賦の恵ありて無形より有形を造り出すの意あり。卑賦より身をおコアして若闘の結果成功するといふ何事にも最後の勝利を得る人である」との書物あり。又或書には姓十五吉声聞在上 所謀諸事楽、捷於影建大功。

名九凶 雖有志気 不純成功 災害並至 或恐少失怙恃 或畏其不寿 或有官刹

総画二十四 吉 才智顯微 勤儉建業 富貴功成 老累倍加昌盛。それから或書物に

貴下の性格としては思慮周到であつて何事にも充分に考へて為し、勝れた記憶力に恵まれて居る

福分は豊であつて世に信用を得て相当の地位に上る事が出来るが、併し一面に理想に迫はれ時間と金銭を浪費する様な失敗が

悄然とまつて四方八方

眺めてゐたら懐かしい

叔母の姿が柳橋

たもとで甘藷を植えてゐる

胸いっぱい飛んでゐた

思つたよりも若いので

呑気に暮してをることが

分つて嬉しくなりました

うら若い頃の気苦労も

夢かうつゝの語り草

お前が出征してからは

高千穂迅社にかゝらずに

武運長久祈つたの

明日は二人で早々と

御礼の御参詣やりませう

雨の夕も風の夜も

何事もなく来られたは

叔母の心の一徹を

神聞居りしたまもので

胸に涙がこみあげる

別れて帰るその時に

叔母の瞳に露宿る

俺の元気が嬉しいか

はた恩愛の哀しみか

いつも変わらぬ母変り

(昭一五、一二、一記)

八、とみ叔母

親族の止めるも聞かずひたすらに幼少より身もこころも神に捧げて自己を捨てた奉仕の生活をつゞけてゐるのに妻の母の妹がある。

かつてカトリック教撲滅運動の波にのせられて反宗徒よりあらゆる迫害を受けながらも「宇宙を創造し、天下の人すべてに生命を与えるのは天にましますデウスの神の恩寵である それ故店の神様に仕へることは人としての道である いかにも世の人々の迫害をうけやうとも尊い神の聖旨に背くことは出来ない」と抵抗することなく、小羊の如くふるへつゝ、尚清く美しく正しく生きてきた叔母、マリアおとみ！

行く人はあれど向ひ来る人はわれに今なし寂しからずやとはかつての叔母の身に思ひ合はされるが、しかしこの体験は余等の想像もつかないほど心楽しいものであるかも知れない。

清浄な心身共に洗はれたやうな明け暮れであらう！

余を誰れよりも好きだといふ叔母！

邪神といふものを持たない叔母！

ずつと以前のことだが余が「敬神愛人」と書き送つたのを無心に喜

に余る甘つた場合がないだけにそれだけに二人は地味な根強い愛情で結ばれてゐるやうなものだつた。

それに運命にいたづらといふのか余は日を経るにつれFに特別な愛情がついていくのだつた。許嫁の姉なる彼女のことは書きたくないがその結婚を機会にもう女とか恋愛とかいふものには一切心を移すまいとしてひたすらにプロレタリア文学に読みふけた。

かくて入営を期に台湾に居残りたるも実にこの苦悩から逃れるためだつた。

かゝることを神ならぬ身の知る由もない親戚知己はもとより殊に死んだ祖母がとめを好きだつたといふので二人の結婚は規定の事実をして世間の目もかく見てゐたのであつた。子供の頃はまるで兄妹みたいに馴れておいて大きくなつたら結婚をせよとは無理かもしれない。封建的な家族主義が余の感情を不具にし今更とめと結婚するなど不倫関係の如き感情が湧いてくるのであつた。

余は余の進むべき道を行きとめはまた他へ嫁しづることが幸福であることをしみじみ思ひつゝ月も過ぎ年もゆきて今はとめも余の最も敬愛してゐた市蔵兄に嫁ぎ数名の母としてなごやかな日を送つてをる。

許嫁なるものが後に台湾の媳婦仔制度を見る目に役にたつたことはいふまでもない。

(媳婦仔とは養女に似てをれども必ず自らの子息にめはすことを旨として縁組なしをるものなり)

妻ひでとはたゞの一度見合もせず文通もせずに結婚した。

除隊後なみじかな世話をうけた早川金助叔父夫妻を信頼しきつ

てゐた余は何もかもご両人におまかせしてゐた。当時東京に居つた秀もまた見合もせずによく来る氣になつたのだと不思議に思つてをる。

国木田独歩氏が十年相遇ひて遂に路傍の石に置く露ほどの戻りもなくして別る、も人と人とのえにしなり、今日見えて今宵語りその夜の夢には既に永への契りを固むるも人と人とのえにしなり、と言つてをられるが余もまた余の結婚が間違つてゐたとはいさゝかも考へない新婚旅行なんて余裕をもたなかつたので台湾神社参詣を終へた二人は警務局の田畑源水叔父の御計らひで北投温泉にあわただし一夜を過ごしたゞけだつた。

かくてより他界生活を築き上げる人生道場へ入つたわけだ。

七、於伝叔母

故郷へ歸つて五日目の

真昼に俺はたゞひとり

叔母をたづねていきました

恋ひし懷かし於伝叔母

畑に行つて留守でした

早く逢ひたい一念で

行けばわかると畑道

合ふ人毎に訪ねては

たゞ一すちにまつしぐら

なか／＼つかぬもどかしさ

中之島公園に桜散る日文豪イブセンの誕生百年祭が公会堂で営まれた。

午後一時半ノルウエーの国家に幕を切り松岡譲先生乃開会の辞、中川知事及関市長の祝辞が代読さる。

次に大朝の後醍醐氏大毎の岡崎副主幹の祝辞、岸田国土、近藤伊与吉岡先生の講演あり後に大阪市音楽隊はベアギユント組曲を奏し、正岡蓉先生がフィッサーの「現代の三角物語」を翻案して「恋のケーブルカー」と台紙落語家気取りで茶色御召の羽織をつけてはやし鳴物入でやり、国民座の森英次郎、三好栄子、出雲美樹子三氏の芝居本読み等あり大いに賑ふ。

夜は六時半より「人形の家」「荒み行く女性」の映画公開あるも余は所用ありて後髪を引かる、思ひで帰り来たり(昭二、四、二六記於大阪)

六、あの頃この頃

余の総本家清原家に一人娘ををる。約十里も離れてゐるので曾つて逢つたことはなかつたがかれいと子に対しロマンチックな憧れとでもいふのか淡い心のときめきを覚えてゐた幼少の折だつたとい子父が家に見えて「いとを厚にやらう」「それは願つてもないことではあるが一人娘は世負へまい」

「二人で両方をみせたらいいさ」

「そんなことは出来ないこともないが厚を廃嫡していとの元へやらうこちらはやえもをるんだから…」

こんなことを何気なしに次の間で聞いてそれまでに家の者から話だ

けを聞かされてゐたいと子に逢つてみたいと思つてゐた。かくて月立ち日立ち

まだ見ぬ娘への淡いあこがれ

先方は一人娘だし余は父が袖商売ですつかり失敗してしまつて学資すらないほどの家の長男であるといふ家庭の境遇を持ち出す迄もなく余等はまたあまりにも若かつた。いはゞ宵にぽつかりと咲く月下美人草のやうに淡くだが懐かしいものではあつた。

いつか逢いたいと思ひながらついぞその降りもなく二十一になつた。

徴兵検査のため帰省中時たま／＼聖上陛下が奄美行幸を仰出され古仁屋港に御上陸遊ばされることになつた。

其の折初めていと子に逢ふことが出来たのであるがいと子の美しい姿だけは年と共に鮮かにそして麗しく余の魂の奥底にくつきりと描かれてゐる。

もし余に初恋なんていふものがあつたとしたらこのいと子であらう。

余の父の従妹にとめといふのがゐる。

これが余の許嫁ともいへるものだつた。

なるほどとめは双方の家できめたものではあつたが何分二人は幼い頃からまるで兄妹のやうな育ち方をしたので世間によくある結婚前の許嫁みたいに濃厚な恋愛感情など殆んど無いといつてよかつた。だからといつてお互に結婚する気持も愛し合ふ心持ちも全然無いのかといえさうではなかつた。

たゞ何しろ長い間のことなので半年や一年の婚約の仲のやうに人目

生を文学にしたしんで通さんと思ふ。今日は都合よく日曜!

雪はチラホラ見えたが寒いといふほどでもなく一服の温みもある。

それで押し合ひへし合ひを予想し早目に中央公会堂へ行く。

午後一時改造社長山本実彦氏の開会之辞に次ぎ大要左の如き話を聞きたり。

佐藤春夫先生 題「文学といふもの」

言葉の芸術である言葉は動物の鳴き声である。私流の解釈は夢と同じ……私は子供の頃夜外に出たり便所に行つたりする時恐いもんだから一人で行かなかつた。父が「何が恐いか」といつたら私は「何が恐いのかわからぬ。知つてゐたらこわくはない」と答へた。誰もが道で怪物に会ふ。すると行過ても判断ができるまでは恐い……

芥川龍之介先生 題「舌頭小説」

ナポレオンの中学時代ノートに「セントヘレナ小さい島」とだけ書いてそれ以上書かなかつた。

コルシカの一小島に美しいスタール夫人を情婦にしたらと言つたがやがて「だが学問のある女はいかぬ」……。ビスマルク、ナポレオン、レーニンの対話が霊の世界であつた。そこにゲーテが通りか、り又革命家ラクレーが来て五名が話をつづけてゐた。すると一通の電報が来て「キミノセカイハミライノセカイ」とあつた。

それを見てゲーテは曰く「ある一部分はミイラになつてゐるかも知れない」……

法学博士 堀江帰一氏 題「不景気を好景気の分岐点」

久米正雄先生 題「漫談(プロレタリア)文学に就て」

弁士大辻四郎が「チャプリンの偽牧師」を私の家へ持て来てこの男が発明したといふ漫談を彼一流の活弁でしやべつた。震災後「母を

求む大辻四郎」と母孝行の彼はあらゆる個所に張紙をした。これは宣伝ポスターである。私等も今日は改造社のポスターである。

作家仲間の中条百合子女史の父の媒介で女流音楽家関鑑子さんと築地小劇場の小野宮吉君が去年結婚するやうになつてゐたが彼女が赤旗行進曲を唄つて警視庁へ呼れた、め中条氏は断つた。それで私が媒酌をした。

ロシア映画「巡洋艦ポテムキン」は横浜まで持つてきたが上映禁止になつた……

安倍徳蔵氏 題「奇術漫談」

舞台魔術、観覧魔術、妖術邪法、呪文、種のあるもの奇術、ないもの魔術、最高の学術、超自然力、原因無くして結果を作出す、魔術と宗教、物理化学の応用等あり。

里見弴 題「真心」

智情意……心的活動……たい……この「たい」ははつきりしてゐるやうであやふや……

鶴見祐輔氏 題「太平洋上の風雲」

永井郁子女史 邦語独唱

箏伴奏 宮城道雄氏

尺八助走 吉田清風氏

コスモス(与謝野晶子作) 母の歌(西条八十作)

紅薔薇(小林愛雄作) せきれい(北原白秋作)

山本氏の閉会之辞にて外へ出づれば夜のとはりはすっかり下りてゐた(昭二、二、二七記於大阪)

其の二、イブセン百年祭

於大阪浦江町)

(大毎会員章写)

大正天皇奉悼式(会員章)

神去りました大正天皇奉悼式は左の順序で挙行致します。

男子部 七日午後六時開始

【上段】

司会 本社事業部助役 世川憲次郎氏

開会之辞本社外国通信部長 川野三通士氏

……奏楽……

奉悼辞 本社主幹 高石眞五郎氏

黙祷(一分間)

奉悼歌 大阪音楽学校合唱団

大正年代史(映画) 一部

秩父宮殿下御帰朝(映画)

東久邇宮殿下御帰朝(映画)

【下段】

注意

服装は不敬に亘らざる限り質素に願ひます。時間勵行致しますから遅れないやう参集を願ひます。挙式中は静肅に願ひます。当日は雨天でも結構致します。晴天の場合は出来得る限り靴又は草履に願ひます。此章を当日必ず御持参願ひます。

大阪毎日新聞社

哀しみ極みなしけふの大みゆき

大正天皇神去りまして四十五日、かねて今日の日は知りつゝ、あまりに早く来てしまつた。
戸毎に弔旗はうなだれる。

鷺洲第一教化連合会、南浦江教育後援会よりも遙拝式参加を願ふとも知らせありしが、世は昨六日前記の如き会員章を受けをりしため中之島中央公会堂へ赴く。

輜車御発引の五分前午後五時五十五分より男子部奉悼式催さる。JOCKより放送する三点鐘が司会の挨拶や開会の辞について五時五十七分より六時迄しづかな堂に哀しく響き渡る。余韻なほ消えやらぬに「哀しみの極」がはじまる 一分間黙祷。六時十八分大毎主幹登壇選定のご盛徳の数々を奉悼辞として朗読し終て大阪音楽学校合唱団が奉唱する「地にひれ伏して天地に、いのりし誠入れられず……」との奉悼歌しめやかに漲る。これより映画となり、式は閉じらる。外氣にふるれば味気なき片割月力なき光を投げ、吹く風は寒く大事は哀しみの薄ら水にとぎ、れ寂しく静まり返り。
薄墨の「奉悼」の文字浮く白張りの提灯もまた一しほさびしく今宵の街頭はいかなる時に比ぶるものなきまでに凍りをれり。(昭二、二、七記於大阪)

五、文学の集い

其の一、日本文学全集出る頃

「物をもいはず、ひとり酒のみて、心に問ひ、心に語る」といふ芭蕉の一生を貫いてゐるといつてもいい、孤独寂寥の人生観はさながらまた世の姿なり。斯く観するとき自ら魂に鞭ち、心を立て直して一

たなるを覚ゆ。

申すも畏きことながら世は大正九年春鹿兒島市にて一回、十四年大阪市にて一回拝顔申し上げをり、これにて三回目なり。

殊に本日は玉歩をはこばせ給ふ路はば狭まかりし為め僅かに一間を置いて拝するの光榮に浴したのであるが、ゝることは以後の生涯に絶対に有り得ないであらう。

昭和の新しい日本を統べ給ふ陛下は泰西の文物が前世紀の古い殻を脱ぎ捨て、廿世紀に其の第一歩を踏み入れた最初の陽春四月二十九日に御誕生あらせらる。これこそは昭和時代の洋々たる前途を点か予示せるものであらう（昭和二、八、七記於古仁屋）

當時余は徵兵検査に規制してそのまゝ、踏止まつてゐた時なので祖父と妹の八重を伴ひ古仁屋にて拝顔の光榮に良くしたのであるがその際祖父は「畏れ多いことだが明治天皇様は自分と同年の子の年であらせられたとして六十一の還暦におかれ遊ばされた。またこの前は大正天皇様がお崩れになつた。神様はわれ／＼如きを御召しになつて高貴の御方はいつ／＼までも御在世遊ばされますやうになされたらいゝに……」と老のメをしばたゝきながら語つた。その祖父も今は亡い。

歴史物語をなすと夜の更くるを知らなかつた祖父は折にふれて四書五経をも余に伝習せんとしたが余は歴史は興を覚えて熱心だつたが漢学は子日子日は大声をたて、ゐたが後の文句はちんぶんかんぶんですつぱり駄目だつた。正史に見ざる数多の史実を先祖代々語り伝え来たりしに父は祖父より先に世を去り世は十七にして家を飛び出し語り継ぐべきはたゞ片鱗のみなるは今更に嘆けどもせんなく実に余は天下の不幸者であり馬鹿者である。

台灣にこの身捨つとも心こそは

永久に告げなむ祖父の姿哉

樋口一葉は物質的困窮の中にあつて「我れは人の世に病苦と失望を慰めんために産まれ來つる詩の神の子なり……しかして此の世ほろびざる限り、わが詩は人の命となりぬべきなり」と書いたそうである。ドブロリユーボフが二十五歳に充たないで死んだ時彼の先輩は「私も亦有益な人間である。しかし彼が死ぬより私が死んだ方がよかつた」と言つたそうである。祖父を偲ぶ度にかうしたことをつくづく思ふ。

四、大正天皇崩御

大正十五年十二月二十五日午前三時五十八分投入された号外は黒枠

「天皇陛下崩御遊ばさる午前一時二十五分」

とある。第五号外の頃まで師走のからつ風がヒュー／＼と狂女のやうな叫び声をあげ、また雪も少しあつたが、いつしかそれはやんでゐた。かくてなにわの街々をゆり動かす鈴の音が崩御を伝へる悲報だつた。

力なげな夕陽がうすれ沈鬱な暮の色にも立ち去ることを忘れて神前に頭を下げるいとけなきもの、純一無垢な赤誠から老若男女のひらすらに御平癒を祈りし切なる至誠も今はたゞ悲し思ひ出となつた。畏くも天皇皇后両陛下、皇太后陛下、英国より御帰朝を急がせらる、秩父宮殿下、並に高松宮殿下、澄宮殿下の御嘆きは御如何にあらせられよう。盈つれば欠くる世の習はせは一天万乗の大君にものがれ給はず。崩御遊ばされしこそ悲しき極である（昭元、一二、二五記）

考へた。

全体が統一を欠き体裁が整はないのも承知の上である。

二、伯仔大人

清和天皇の御詔勅に

「皇天親なく百姓を以て親と為す」といふ御言葉があるが之でついて来ない民衆はない筈だ。余は死ぬも生きるも民衆と共にを信条としてをる。

「師玉伯仔」と呼ばる、は余を知る限りの本島人（台湾）大衆が立派なをぢさんをもつたとなづき敬愛しをるものと自惚れてい、と思つてをる。

水滸伝に徽宗皇帝の頃戴宗の部下の燕青が李師々と姉弟の契を結び、李師々が「あなたの姉さんになるんですつて？光栄だわ。でもあなたのやうな立派な弟さんをもつて罰があたぬか知ら？」……かくして李師々の客間の隣にある部屋をあてがはれたが一家の人々は心から燕青を歓迎したばかりでなく何れも燕青ををぢさんくんと読んでゐたといふやうなことがあるが「伯仔」といふことは父母よりも上に位するものの、肉親の呼び名である

又長老連にして阿兄と呼ぶ者もある。中にも上海東南大学医学部を卒業し曾て「上海反帝同盟」関係者たりし陳鄱湖は余の応召中妻と長女を自宅に引取り「師玉伯仔の為めなれば自分の数万の財を費消するも惜まず」として自ら武田雅八郎と内地名を名乗りて毎日援助し生活に事欠さず後顧の憂なからしめた。

かく言はるれば言はる、ほど余もまた桃源の夢をのみ追つてはをれ

ない。惟神の道、孔子の仁、釈迦の慈悲、基督の愛等を彼らに説くまへに余自身深くそれをさとらねばならない。

蓬萊の島照らさなむ笹龍胆

さびしけれども包ひ起さん

村巡査はとほしけれども今日もまた

伯仔々々で心なごめり

日記より 三、奄美行事

奄美島今日の行幸の畏きに

老ひの瞳は涙浮き見ゆ

龍顔を排し奉りし祖父当正志及当喜二の姿である。

奄美の山や海朗らかに明け陽光映ゆる今日、二十余万同胞の一斉に挙げし歓呼の声。聖上陛下には連合艦隊戦闘射撃及び爆撃実験を御親閲のため太平洋に御巡航遊ばされ御ついでをもつて民情御視察のため小笠原島並に本島に行幸あらせられる御模様と報ぜられてより島民歓喜しひたすらこの日を御街申した。昨六日夕刻清らかな水面を迂り入る軍艦、四隻目に天皇旗橋頭高く翻るこれ山城で五隻目は供奉の扶桑なり。此の光景誰か感涙せざる者あらん。

一夜明けて皇礼砲（二十一発）の発射と共に御上陸遊ばされる。

神代は天孫の降り給いしと聞きつれど天皇の本島へ公式に成らせられしは嚙矢なれば飲びばかりの中にときの移りゆく苦なるものを世は諒闇の憂愁にありたれば島民は物静かにして国喪に服する様おごそこかにしてまた肅かなりき。

城の海軍服を召され喪章を附せらる、を拝しては今更の如く涙の新

の聞き取り調査によっていくつかの証言は得ているが、当時書かれた個人の資料としてはこの厚氏の日記以外には確認できていない。厚氏が小さくても家族三人で暮らせる家屋の購入を急いだことは、収容所の食糧事情や衛生状態に問題があったという聞き取り調査の証言と突き合わせて考えることができるだろう。また、厚氏の日記からは、いつ島に帰れるかわからない暗澹たる気持ちを抱えながら、生計の一部を闇市に頼る生活だったことがうかがえる。公の資料には現れない、奄美群島出身引揚者の生活記録として興味深い。

筆者は、この厚氏の「敗戦日記」と同時期にアツミ氏が書いた日記も、同時にお借りして閲覧している。父と娘、それぞれの眼から見た、敗戦後の台湾生活と奄美大島への引揚げを待つ鹿児島での生活（アツミ氏の日記は奄美大島への引揚げ後も続いている）の記録は非常に貴重であり、アツミ氏の日記の翻刻も行いたいと考えている。

なお、厚氏が残した手記群について調査を行った東京外国語大学友常勉教授によれば、厚氏の手記は本資料以外に、一九三〇年代の日記を中心に四冊の存在が確認されたと伺っている。

凡例

○一般名詞や一般動詞などにおける、明らかな漢字の誤字・脱字の場合は訂正を加え、断り書きは付していない。

○判読できない文字は□とした。

○旧字・異体字については基本的に新字体に改めたが、現今の使用状況に鑑み、あえて旧字体や異体字を残した箇所もある。

○原資料には修正等のために後から加筆されたとみられる記述も見受けられる。これについては本来挿入されるべき箇所に組み込んだ状態で翻刻を行い、断り書きは付していない。また、本文の一部を棒線で消して横に書き改められた箇所についても同様である。

○作業者による注記を行う場合は【】を使用した。本文中の（）で括られた箇所は原文のままである。

切れぐゝ乃思ひ出 在台灣 師玉厚

【二四一×一六二×二二mm／一〇一頁／私製ノート】

一、続く夢

おまはりや父とし娘とし今日も暮

これが句になつてゐるかどうかわからないがこれが現在乃余の心境である。

何等自ら語るべき経歴もなく伝ふべき事柄もないがヒヨシヤ（瑠璃掛鳥）をむしつたやうな細い弱い身で生れ落ちた時泣き声さへもあげ得ず正に捨て去らるべきであつた余が四十になん／＼とする今日まで聖代のあまねき御陵威に浴しをるはたぐゝ感謝の一念につくのみである。

自らのちよびつとした記憶力を頼んで何等これとて書き残しを多くもたないしました書き残す何物もないのではあるが折にふれて夢のやうに過ぎた三十有余年の思ひでを書いてみたいと柄にもないことを

翻刻 切れぐ乃思ひ出 在台灣 師玉厚

高嶋朋子（東京大学）

『切れぐ乃思ひ出』は、奄美大島・住用出身の師玉厚氏が残した手記（日記）である。師玉厚氏（一九〇七―一九五六）は、高等小学校修了後に住用から大阪に出て、働きながら中学・英語学校に通う生活をしていたが、その後、巡査試験を受け、台湾総督府警察官として台中州に赴任した。一九三〇年代始めには、霧社事件に関わった原住民を収容した強制収容所のあったロードフ社の警察官吏駐在所に勤務しており、当時の日記は、第二霧社事件の資料として『現代史資料』台湾（一九七一年、みすず書房）に収録されている。

筆者は厚氏の手記を保管してきた息女アツミ氏の厚意により、二〇一六年二月に、『切れぐ乃思ひ出』をお借りして閲覧した。自家製本された一〇〇頁余の手記は台湾生活の最後期ごろから書かれたもので十一章から成っており、過去の日記を書き起こしたもののや雑文によって構成されている。

しかし、最後の十一章はやや性格が異なる。十一章は、「明日より出勤するに及ばず」との命令を受けた一九四五年十二月六日から、奄美大島に引き揚げる前の一九四六年十月二日までの記録で「敗戦日記」と題されており、内容から、①台湾から日本への引揚待機期間中の四十九日分の日記（一九四六年四月六日まで）と、②引揚船が和歌山に着き、陸路で鹿児島市に到着してから奄美大島へ引き揚

げるまでの待機期間中十五日分の日記（一九四六年四月八日から一九四六年十月二日まで）と、大別することができる。

①では、夫婦と娘の三人家族だった師玉家は、台中州比斗郡二林庄にあった住宅から同州沙山庄秋津村川辺部落へ転居した。沙山庄は一九三二年に台湾西部初の農業移民招致地として定められた地域で、仕事と土地を求めて移住した日本人が居住しており、特に九州出身者が多かった。厚氏は、当時秋津青年学校で指導員をしていた熊本出身の猿渡城人氏を頼って、この転居を進めている。敗戦後の在台日本人にとって食糧調達や現地人からの報復が問題だったことについては、筆者が行ってきた台湾引揚者への聞き取り調査でも証言があつたが、厚氏の日記でも、数家族が協力して田畑を耕し作物を得ていた様子や近隣の日本人村が強盗に襲われたことなどが記されている。

また、上記した②にあたる、鹿児島市における奄美大島への引揚待機期間中の日記も貴重である。日本から行政分離されてアメリカの統治下に置かれる範囲が確定するまで、沖縄県と北緯三十度以南の鹿児島県に本籍を持つ引揚者は、鹿児島市内などに作られた引揚者収容施設で、または親類をたよって、一時的な生活を送らざるを得ず、島への引揚船に乗る順番待ちのために数ヶ月の間そこで足留めされていた。こうした各島に引き揚げるまでの厳しい生活については、あまり知られていない。筆者は奄美群島出身の引揚者へ